

1 第 24 回千葉県普及活動 成果発表大会発表資料

第 24 回千葉県普及活動成果発表大会は、令和 7 年 1 月 10 日(金)に、千葉県教育会館にて開催されました。

繋げ！岬の梨産地を次世代へ

～ 地域一丸となって進める産地活性化への取組 ～

夷隅農業事務所改良普及課

活動事例の要旨

一宮・岬梨組合岬支部においては、温暖な気候と「幸水」の簡易被覆栽培による「県内一の早出し産地」として知られ、盆前を中心に高品質の果実を早期出荷することによって有利販売を実現している産地である。しかし、近年生産者の高齢化や老木化などにより産地の縮小が顕著であったため、当所改良普及課は産地の維持発展に向けた産地の目標である「産地ビジョン」の策定を柱に関係機関と生産基盤の強化を図った。その結果、令和元年から令和6年までの6年間で計10名の新規就農者（うち参入者数3名）が就農するとともに、市場出荷額も令和元年以降右肩上がりとなっており、産地の活性化に繋がった。

1 活動のねらい・目標

生産者数の減少、労力の不足、老木化の進行など、当産地の課題である生産基盤の脆弱化を克服するため、生産者及び関係機関一丸となり産地の今後について検討する場「岬梨産地を考える会」を設置し、組合活動の活性化など産地のアップデートを図るとともに、産地のあり方を「産地ビジョン」として策定することで、産地の合意形成に繋げることとした。また、今後の産地を担っていく新規就農者らの育成と技術力向上、既存生産者の生産性向上を図ること、産地の活性化に繋げ、次世代に繋がる産地の形成を目指す。

2 活動の内容

（1）「岬梨産地を考える会」の設置と「産地ビジョン」の策定

令和4年度から、今後の産地を担っていく若手生産者を中心にＪＡいすみ、いすみ市、夷隅農業事務所が一堂に会し、当産地の課題は何か、どのような解決方法が考えられるかなどを話し合い「産地ビジョン」策定に向け意見をまとめた（写真1）。各回においてより多くの意見が挙げられるよう討議テーマを定め、情報共有を図った。改良普及課は、主に会議全体のコーディネート、関係機関との連携支援などの役割を担った。

産地のアップデートに向け、今年度はいすみ市と連携し販路拡大の検討試験（直売方法の多様化）を実施した。



写真1 「岬梨産地を考える会」の様子

(2) 新規就農者の育成体制整備と技術力向上

ア 新規就農者の受入体制整備

新規参入希望者の相談が増加したことにより産地内で受入体制の整備が必要となったことから、令和3年3月に新規就農者育成総合対策のうち就農準備資金(旧農業次世代人材投資事業)に係る研修機関としていすみ市が認定された。当事務所は技術的な視点から研修カリキュラムの策定支援、個別巡回等を通じた就農支援などを中心に実施した。

イ 農業経営体育成セミナーにおける果樹専門講座の開講

梨での新規就農者増加に伴い、果樹に特化した学習の機会提供と生産者同士の交流促進を目的に、令和4年度より農業経営体育成セミナーにおいて果樹専門講座を開講し、県内・県外の果樹先進事例視察や研修会に参加者の要望に沿って実施した。

ウ 女性梨栽培技術講習会の開講

新規就農者のうち女性においては、男性ばかりの環境である組合主催の講習会に参加しにくいとの声を受け、女性生産者の栽培技術力向上及び女性生産者同士の交流促進を目的に、令和4年度より女性梨栽培技術講習会を栽培管理ごとに開催した。

(3) 生産力向上に向けた取組の実施

ア 農福連携・家族外労力の活用

令和2年度からお試しノウフク制度を用いて社会福祉法人土穂会ピア宮敷に枝拾い作業(剪定時に圃場内に落とした枝を作業者が拾い集める作業)を委託し、累計14戸の利用があった。また、作業委託の範囲拡大を目指し、令和5年度に花蕾採取作業(梨の授粉用花粉採取のため、枝から花蕾を採取する作業)の委託導入を試行し令和6年度に運用開始を行ったところ、2戸の利用があり、花粉の安定確保における労力補完に繋がった。また、家族外労力(近隣の住民、NPO法人、サーファーなど)を新たな労力として活用できるよう、労力補完に関する運用支援を行った。



写真2 花蕾採取作業委託の様子

イ 新植・改植の促進と圃場環境の改善

当組合岬支部における「幸水」栽培面積は、全栽培面積の53.6%を占めている一方、経済寿命である30年を超えている樹がほとんどであり、樹の更新が急務となっていた。そこで、平成30年度に大苗育苗施設を設置し、省力化栽培による作業効率化を推進するとともに、果樹経営支援対策事業など補助事業を活用し、自己負担を低減することによって新植・改植の推進を行った。当事務所は、実際に新植・改植における経営モデルを示すことで新植・改植の重要性周知や事業活用支援を行った。

3 活動の成果

(1) 「岬梨産地を考える会」の設置と「産地ビジョン」の策定

「岬梨産地を考える会」をこれまでに7回開催したことで、着実な産地の意見とりまとめに繋がりがつつある。討議テーマを定めて会議を重ねることで、生産者自身が産地全体の課題や解決方法について考えるきっかけとなるとともに、「産地ビジョン」策定に向けた下地作りに繋がった。また、「岬梨産地を考える会」を発端に産地の課題について議論する場が整備されたことで、生産者自身が次世代に産地を繋げるという意識が高まった。

(2) 新規就農者の育成体制整備と技術力向上

新規就農者の受入体制を整備したことにより、令和元年からの6年間で計10名の新規就農者が定着し、産地の若返りに繋がった。また、新規就農者の技

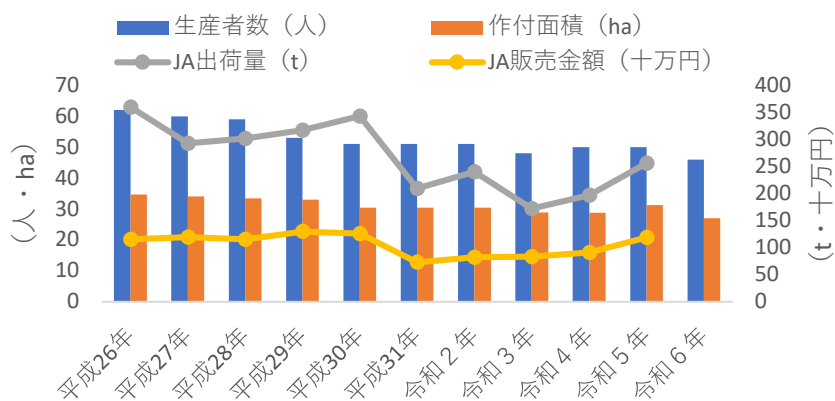


図1 岬支部の概要

術力向上に向けた取組においては、農業経営体育成セミナー果樹専門講座の出席率が平均80%を超えた。女性生産者も含めた新規就農者全体の技術力向上により、出荷量の改善に繋がった。

(3) 生産力向上に向けた取組の実施

産地の若返り化を推進したことにより、産地内の若手生産者（後継者がいる又は経営主が50歳未満の経営体）の占める人数割合は30.4%、面積割合は支部全体面積の57.4%となった。また、生産性の向上に向けた取組の実施により、令和5年度の市場出荷金額は令和元年と比較し163%となった。加えて、若手生産者を中心に新植・改植が計画的に進んでおり、令和元年からの6年間で支部栽培面積の9.8%（栽植本数による概算）が新植・改植され、産地の若返りに繋がった。

4 将来の方向と課題

「岬梨産地を考える会」において「若手生産者組織である研究部の活動強化」「販売時における新規直売用袋の作製」「新規新植園造成の検討」が挙がっており、今後の活動において更に実現性を高め、産地のアップデートを続けていく。また、新規就農者の経営安定化に向けた取組強化や、農福連携など家族外労力の活用、計画的な新植・改植においては、生産者自身の経営について見直す機会となるよう、更なる周知を進めていく。

次世代に繋がる産地形成のため、産地全体の意識向上と「産地ビジョン」を柱とした産地のアップデートを続け、よりよい産地形成を進めていく。